手仕事の温もりと技を伝え、暮らしに創る喜び・思いを伝える

伝統工芸品「南部裂織（なんぶさきおり）」

「裂織」とは、傷んだり、不要となった布を裂いて横糸『緯（ぬき）』にして地機（じばた）で織る、機（はた）織りの一つの技法。または、織り上げた織物のこと。

寒冷な気候のため綿を栽培できなかった雪国（南部地方）では、暖かい綿は貴重であり、端切れも粗末にすることなく最後の最後まで大切に使う「使い切る布文化」が発達しました。

「裂織」は布を大切にする女の知恵、手仕事から生まれたものです。

素朴な風合を織りなす ―青森県伝統工芸― 南部裂織 認定

南部裂織とは

江戸時代、南部地方では寒冷な気候のため、綿の栽培は難しく、木綿などはとても貴重なものでした。それら布は大切に使われ、ほんの少しの端切れも重ねて刺し子にしたり、最後には裂いて、地機で経糸（たていと）に麻を張り、緯糸（よこいと）に裂いた布を織り込んで再利用していました。その機織りの一つの技法。また、作った織物のことを南部裂織といいます。

戦前は、夜着（よぎ）（寝るときに掛ける夜具。かいまき）や仕事着、帯、前掛け、こたつ掛けなどが作られていましたが、最近では、ソファやベッドのカバー、ラグなど、現代の生活に合った「裂織」が織られています。

南部裂織は、本市を代表する伝統工芸品として、市褒賞などの記念品に使用され、最近では友好都市提携30周年の記念品として花巻市にも贈られています。

南部裂織の歴史

明治26年の鉄道開通以降、南部地方では、木綿や古手木綿が本格的に手に入るようになり、カラフルな裂き織りが織られるようになりました。

裂き織りは、農家の自給自足の生活から生まれた織物で、農家の女性は農閑期には、こたつ掛けや帯を織って現金を得ていました。それ以前は、縦も横も全て麻で織り、織られた麻布は野良着などの生活用品に使われていました。

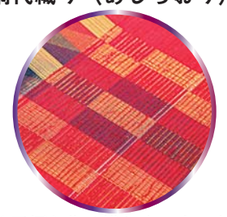
裂き織りの織り方

裂き織りには、いろいろな織り方があります。ここでは、その織り方の一例を紹介します。

平織（ひらおり）

平織はもっとも基本的な織り方で、裂き織りの面白さが良く分かります。

網代織り（あじろおり）



格子柄を作る織り方です。布を裂いた緯と糸を交互に織り込んでいきます。

しかし、昭和23年の大麻取締法の制定により、麻を育てることができなくなり、また戦後生活が豊かになったことで裂き織りは廃れていきました。

南部裂織保存会

戦後、地域での伝承が危ぶまれ、失われつつあった南部裂織の普及・継承のため、『暮らしに創る喜びを、手仕事の温もりをいつまでも』をモットーに昭和50年7月7日七夕（棚機（たなばた））に設立されたのが南部裂織保存会です。

同保存会の創立者である故菅野（かんの）暎子さんの考え「裂き織りの創る喜びと感動を自分一人のものにしておくのはもったいない。自分一人で百の作品を仕上げるよりも、百人に教えれば、百の喜びと感動があるはず」を受け継いだ会員らが、現在も裂き織りの楽しさを広める活動を行っています。

また、同保存会では『南部裂織はふるさとの誇るべき文化であり、今後地域の産業にもなりうる』と考え、伝統的な作品ばかりではなく、現代の生活に合った製品を会員自らが製作し、地域の特産として販売しています。

南部裂織は「ふるさとのたからもの」

保存会を立ち上げた妹の菅野暎子が目指した理想は『まずは南部裂織の伝承と普及、そして観光や経済に役立て教育に生かしたい。そして芸術に高めること。さらに、地機織りで女性の心を癒し、和みの場所を提供したい』ということでした。この理想を引き継いできたことが青森県の文化賞受賞につながったと思います。

これからも会員の方たちと一緒に「南部裂織はふるさとの文化・たからもの」と考え、地機の手技を遺し、伝えていきたいです。

また、「南部裂織」を次の世代に伝えていくためには、保存会の会員や体験者、特に市内の方が増えてほしいと思っています。

南部裂織保存会会長
小林（こばやし） 輝子（てるこ） さん

祝 青森県文化賞受賞

故菅野さん（南部裂織保存会創立30周年企画）「南部さきおりフェスタin十和田 こたつ掛け300枚展」のこたつ掛けの前で

同保存会は、地域での伝承が危ぶまれていた南部裂織の普及・継承に向けて、後継者の育成や地機など資源の保全に長年取り組んできました。

また、裂織体験などを通して、子どもたちの「ふるさとを愛する心」の醸成に尽力してきたことや国内外の観光客への魅力発信・体験プログラムの提供などによる観光振興に寄与するなど、伝統文化の継承・発展に大きく貢献したことが認められ、令和元年度青森県文化賞を受賞しました。

次の世代へ伝える

同保存会は、毎週水曜日を稽古日として教室を開いています。教室は、本格的に裂き織りを学んでみたい人向けの「本科」「研究科」「師範科」の3つのカリキュラムがあります。「本科」では、伝統ある「地機織り」の整経などを学び、こたつ掛けを復元します。「研究科」では、さまざまな織り方を学び、「師範科」では、裂き織りを伝統工芸へと高め、織りの技術と物を大切にする心を伝える指導者を育成します。

また、少しだけやってみたい人には体験もあります。グループでの体験も可能で、市内の小・中学生や高校生も「裂織」という昔ながらの手技を学び、地元の伝統文化を体験しています。

織人（おりんと）の声

南部裂織を学ぶため、和歌山県から来た信貴（しぎ）さんは「もともと織物が好きで、本を見たりして独学で『箱織り』などやっていました。また、小さい頃からエコな生活もしていたので、エコと織物が一緒になった『南部裂織』に出会い、裂き織りを楽しみながら学んでいます」と話していました。

また、本市の移住・定住支援事業を活用して三重県から移住してきた小西彌（ひさし）さんは「十和田市に住んで何か没頭できるものを探していたときに『南部裂織』に出会いました。もともとインテリアデザインの仕事をしていたので、物づくりが好きで色を扱う点でも通じるものがあり、楽しんで織っています」と話していました。

皆さんも、地元の伝統工芸品「南部裂織」に触れ、手づくりの良さを感じてみませんか。

◆南部裂織教室
とき　毎週水曜日
午前10時～午後4時

◆南部裂織体験
とき　火曜日～日曜日
午前10時～午後4時
（受付　午後2時45分まで）
※5人以上は事前に予約が必要です。
◆いずれも
ところ　道の駅とわだ匠工房（月曜日休館）
※詳しくはお問い合わせください。

申問 南部裂織保存会　匠工房「南部裂織の里」☎⑳8700